
古代アメリカ学会会報

第28号



「ペルー・リマ県 チャンカイ谷ロマス・デ・ラチャイ遺跡の岩絵」(2009年10月撮影) ©浅見恵理

目次

◆会員からの投稿

◆『古代アメリカ』の原稿募集

◆事務局からのお知らせ

2010年9月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会員からの報告

●ガジート・シエゴ湖上遊覧

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

ボートで通う発掘現場というのはなかなかあるまい。ペルー北部ヘケテペケ川中流域のテンブラデーラ村周辺では、もともと北岸に道路と集落が偏っていたが、80年代にガジート・シエゴ貯水池が建設されると南岸は遠く離れ、完全に無人となった。そこに目当ての遺跡があるため、2009年の調査では毎朝ボートで漕ぎつける羽目になったのである。当初は釣りでも楽しみながら行こうと思っていたが、調査が始まってみればそんな余裕はなく、下流方面からの波風に揺られながら朝夕ぼおっと湖畔を眺めていたのだった。思えばこれまで通算8年4シーズン、南北の湖畔を調査してきたが、遺跡や村を湖上から望む機会はそうなかった。

ペルー考古学においてかなり名の知れたこの土地だが、貯水池ができて以来、語られる機会がめっきり減った。私なりに紹介してみよう。

【南岸・モスキート平原へ渡る】

南岸の調査地はモスキート平原という。モスキートは蚊（サンクード）ではなくブユに相当する吸血昆虫である。非常に興味深い遺跡群が展開し、観光資源として大きな潜在性があると思うのだが、この名前では観光客も寄りつかないだろう。一帯はロバが放し飼いになっている。サンタ・カタリナ農業組合は年に一度、チャク（追込猟）でロバを殺さずに全頭捕らえ、登録ののうち一部を売却し、また解放するのだそうだ。荒らされるような農地もなく、家畜泥棒も来ようがない南岸ならではの活動である。ロバは夜になると貯水池に水を飲みにくる。発掘中の遺跡の番人は、泥棒よりむしろロバが発掘区に踏み込まないよう見張っていた。

北岸テンブラデーラ村から陸路、靴を脱いで浅瀬を渡る方法もあるが、09年の発掘地点まではやや遠いため舟で直行することにした。あいにくモーターが故障中だったため手漕ぎである。考古学者と作業員で計10人前後、2艘に分乗して競うように漕ぐ。時間が経つにつれて波が高くなり、帰路はとくに時間がかかった。ペルーの学校の多くはプールがないの

で、泳ぎを知らない人が多い。唯一水泳教育を受けている日本人の私だが、正真正銘のカナヅチである。しかも着衣で落水したらまず助からない。湖底の厚い泥に吞まれ、過去に何人もの観光客が命を落としているのだ。そこで発掘前に救命胴衣を多数購入した。再利用の発泡スチロールを縫い閉じただけという趣の貧相な品だが、なかなか見つからず遠くトルヒーヨ市でようやく入手した。

なお漁業に携わる一部の住民は巧みに泳ぐ。テンブラデーラ村のL氏は自動車の運転のみならず、昼ごろボートで我々の弁当を持ってくるという重要任務も担当したが、日によってはすでに波が高く、しばしば到着は遅れた。そんなときは遠く湖上に、泳ぎながらロープでボートを引っ張るL氏の勇姿が見られるのだった。



【テンブラデーラ村】

60年代、干魃に苦しむ農民の手で続々と盗掘された凄まじく個性的な土器の一群は、「テンブラデーラ様式」の名で知られる存在となった。私がそれに初めて出会ったのは94年、東京大学総合研究資料館（現・博物館）での「文明の想像力」展である。その衝撃は進路に迷う学部3年生の背を押し、この分野に進ませる一因となった。やがてそれが私の調査地となり、私がその博物館に籍を置く身となったのはやや不思議な縁を感じる。

ただし現地に行くとわかるが、テンブラデーラ村自体は遺跡が少ない。私にとっては調査中の逗留地として重要である。海岸と高地を結ぶ幹線道路上の最大の集落で、商店の品ぞろえも申し分ない。03年

に宴会の出し物のために、隊の女性メンバー全員(女装男性1名含む)が浴衣を縫ったのだが、見事に和柄の布地が入手できたのには驚いた。貯水池によりやや気温が抑えられ、過ごしやすい気候である。総じて居心地のいい環境だ。ややほこりっぽいのは、町の裏山すべてがセメント会社の所有で、石灰岩の採掘のため毎日ダイナマイトを炸裂させるからである。村の発祥は19世紀末と比較的新しい。村名は「身震い」の意で、かつてこのあたりが湿地帯だったころ、蚊の媒介するマラリアが流行したことに由来するとされる。ラス・ワカス遺跡の発掘において私は、現在の貯水池さながら、かつてこの一帯が水没していたことを確認した。湿地はその名残りだったのかもしれない。現在蚊はほとんどいないが、早朝と日没時にはブユが出る。夕方にホテルの庭で、うっかり素足にサンダル履きで来客と話し込み、両足を文字通り完膚なきまでに刺され、歩行困難に陥ったことがある。

村の中心、小学校の2階は考古学博物館で、校長が館長を兼任している。私の調査による出土品もいくつか展示できればと思い、現校長にアポを取って会見しようとしたが、明るいうちから聞こし召して話ができなかった。長年まともに開館しておらず、過去に収蔵品が流出したこともあるといい、当分観光の目玉にはなりそうにない。一方頼もしいのは名物のカマロン(川エビ)だ。扱う業者の限られた高級食材だが根強い人気がある。日曜の午後はしばしば仲間を誘い、湖を見晴らす食堂に行った。店のおすすめはたいいてい al ajo (ニンニク風味フライ)だが、私はそれをおつまみか2皿目にまわし、メインはたいいてい atomatado de colita (殻むき・トマト煮込み)にする。刻んだタマネギ・トウガラシと一緒に白米に載せる。これがビールの売り上げに大いに貢献した。なお実際には貯水池建設に伴ってほとんど穫れなくなり、他所から取り寄せているとの噂も聞く。

【チュンガル集落】

「テンブラデーラ様式」土器のほとんどは、実際は北岸アマカス平原一帯の出自であろう。とくにチュンガル村付近は盗掘が盛んだったと聞く。実際この付近を発掘した際、原型をとどめぬほど基壇建築が攪乱されていて驚いた。村の大部分が貯水池に沈んだ後も、水位が大幅に下がった際、残ったお宝を掘り出そうと村の跡地に盗掘者が詰めかけたという。

この村に凄腕の元・盗掘者がいる。学界を震撼させた名品の何割かは彼の仕業だろう。写真を示して尋ねれば、出土地の情報が得られるかもしれない。しかし彼の息子を発掘で雇ったとき、現場で問題を起こしたため解雇せざるをえず、それ以来近づきにくくなってしまった。彼の逸品はいつも高額で売れたが、そのたびに楽団を呼んで大宴会を開き、きれいさっぱり散財したという。老人は今日も家の前のベンチに座り、行き交う車をただ眺めている。貯水池建設とともに彼の黄金時代は終わったのだろう

(つまり彼の「金鉱」は水没した河川敷にあったと私は見ている)。

【ラス・ワカス集落】

もとは水没したモンテグランデ村の外縁部である。ワカという語は北部ペルーではほぼ「マウンド遺跡」と同義であるが、この一帯はまさに「遺跡群」であった。うち最大の形成期神殿に、考古学者が集落名を冠したのである。ラス・ワカス遺跡は私の調査の拠点となったが、無個性で芸のないこのネーミングがつくづく恨めしかった。09年、調査範囲を拡張するにあたり「ラス・ワカス・プロジェクト」から「テンブラデーラ・プロジェクト」へと、せめてプロジェクト名を変更してみた。

ラス・ワカスの住人の多くは水没後にやってきた新住人で、ヒツジ・ヤギを飼うほか、貯水池で漁をする者もいる。友人D氏はキャンプ場を経営していたが、あまりはやっている様子はなく、後から始めた建材用石材の採掘がむしろ主業になったように見えた。しかし近年新たなビジネスチャンスをもたにしつつある。ひとつはウィンドサーフィンで、すでに2007年に全国大会を誘致した実績がある。そして2010年6月にはかつて遺跡が削り取られた跡地を整地し、第1回のもトクロス大会が開催されたはずである。地域社会は貯水池の存在を前提に、常に新たな挑戦を続けている。

一方考古学の世界では、貯水池の傷は深かった。近年、送電線建設に先駆けて事前調査があり、近隣の遺跡のいくつかが保護のため国の史跡に指定されたのだが、友人を通じその報告書を入手して驚いた。「ラス・ワカスⅡ・Ⅲ」遺跡というのがあるのだが、私の掘った遺跡が「Ⅰ」ということらしく、「Ⅱ・Ⅲ」というのは別の地点、どう見ても有名なモンテグランデ遺跡のことなのであった。はたしてモンテ

グランデ遺跡の傍らには「史跡ラス・ワカスⅡ・Ⅲ遺跡」というコンクリートの標識が立っていた。ペルーの文化財行政は制度を整えつつあるが、現場ではかくもずさんな執行がまかり通っている。それも問題であるが、私としてはこの地域への学界の無関心、あるいは忘却の進行を見せつけられる思いであった。

03年に米国の著名な形成期研究者と会い、来週からテンブラデーラに発掘に行くと言ったところ、まだ掘れたのか…!?とあっけにとられていた。彼に限らず、水没後は何も残らないというふれこみであったし、99年に日本調査団が「再発見」するまで、わざわざ訪問する考古学者はいなかったようだ。水没

後の出版物においてテンブラデーラへの言及は限定的で、研究の進捗に伴う見直しが積極的に計られたという印象も受けない。特徴的な土器、おびただしい神殿群など、なにかとても重要な事例であったのに、調査不十分のまま永久に失われてしまった…という暗澹たる気持ちが、この地から目を背けさせていたように思える。私の研究においても、貯水池の存在はたしかに大きな障害であったが、それでもある程度の成果を発表することができ、多くの研究者から肯定的な意見をいただいた。ふたたびこの地に関心を集めることができただけでも、苦勞した甲斐があったと思っている。

●テオティワカン遺跡、ラ・ベンティージャ地区

福原弘識

愛知県立大学の杉山三郎特任教授率いるテオティワカン遺跡の測量調査は、1999年の開始から今年で11年目を迎えた。この一環として、メキシコ国立人類学歴史学研究所のルベン・カブレラ教授が統率するラ・ベンティージャ発掘調査地区の測量調査が2009年9月から4月まで行われ、私も参加させていただくことができた。この地区は一般公開されていないが、近年中の公開に向けて発掘調査と保存・修復作業が行われている。本報告ではラ・ベンティージャ地区の調査史と概要を紹介する。

今回、測量調査を行ったのはラ・ベンティージャ1992-94と呼ばれる区域で、市場とも言われる「巨大複合施設」の南西にあり(図1)、一般公開に向けて準備されている。ラ・ベンティージャとは元々、現在の遺跡公園の南西にあった広大な農場の名前であり、その農場の敷地で発掘された住居や神殿跡の発掘区には「ラ・ベンティージャ」の名前が冠されてきた。しかしこれらが特別な関連を持つわけではない。この他にもラ・ベンティージャA、B、Cの3区域があるが既に埋められており、

測量を行うことはできなかった。ラ・ベンティージャ地区を含む都市周縁部の遺構の大半は、アパート式住居と呼ばれる住居遺構である。テオティワカンの住居は、碁盤目状に整備された計画都市の一区画の土地を大きな壁で囲い込み、その中を神殿や中庭、祭壇、貯蔵室、部屋などに区分した集合住宅である。大きさにばらつきが見られるが、平均60×60m程で、20人から100人程の、階層や階級を同じくする大家族や、工芸品生産を担う同業集団によって居住されたこれらアパート形式住居の数は約2400個あるとされ、一つ一つが共同の儀礼や政治、生産の単位として機能していた。

ラ・ベンティージャAは、1960年代初頭にロマン・ピニャ・チャンの指揮下に発掘が行われた。メキシコ湾岸との交流を示唆する遺物が多く出土

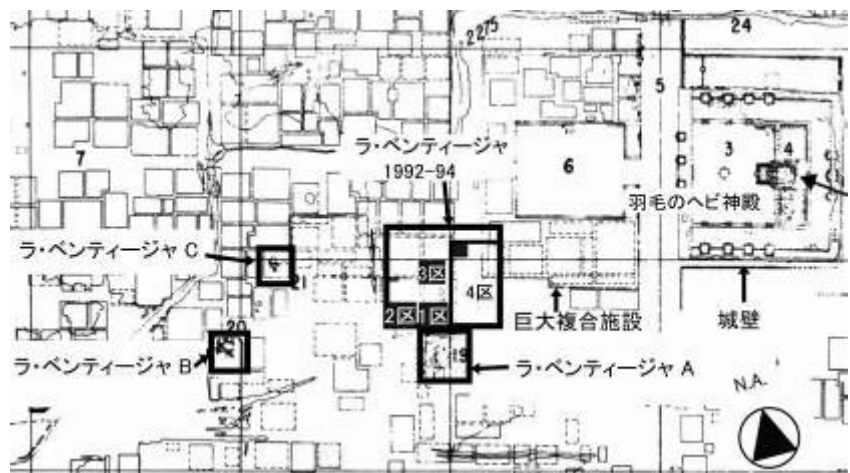


図1 ラ・ベンティージャ地区 (Millon et. al. 1973 より転用・加筆)

しており、有名な球戯場のマーカーとみられる石彫もここから見つかった。ラ・ベンティージャ B は、1960 年代初頭に高速道路建設のため、ファン・ビダルテの指揮下に発掘が行われた。多くの床下埋葬が発見され、埋葬習慣の分析や血縁関係の分析が行われた。ここでもエル・タヒンをはじめとするメキシコ湾岸地域からの搬入土器が確認されている。ラ・ベンティージャ C は、誰がいつ発掘したか報告されておらず詳細は不明だが、マッピング・プロジェクトの地図には調査区域が記されており、1960 年代以前の発掘であることがわかる。また 1985 年にオクタビオ・コロナによって、エル・オレオ農場（旧ラ・ベンティージャ農場の一部）の発掘も行われた。

ラ・ベンティージャ 1992-94 の発掘は、1992 年に開始された大型スーパー建設のための緊急発掘調査が発端であった。しかし発掘開始当初から重要な建築物や遺物が発見され、急遽、学術調査団が生まれ、1994 年まで続く大規模調査になった。発掘は 4 区に渡って行われ、3 つのアパート式住居の全面発掘と 6 つ以上の部分発掘により、計 9 つ以上のアパート式住居が確認された。また 2009 年には 2 区の西側に隣接する別のアパート式住居が部分発掘され、新たに 5 区として加わっている。一部のアパート式住居では、西暦 150 年頃からテオティワカンの中心地区が放棄された後の時代（西暦 650-900 年）までの長期に渡る使用が確認されている。

1 区は大きな神殿と中庭、祭壇、部屋などで構成され、精巧な壁画が残るアパート式住居である。居住に使用されたと考えられる部屋があるものの、むしろ儀礼活動や行政に特化した区画であったと考えられる。建築物の分析から、土器だけではなく壁画装飾の編年作業も行われている。2 区も壁画が多く残るエリートのアパート式住居であり、儀礼や行政が行われたと考えられている。2 区の特徴は「象形文字の広場（図 2）」の床上に描かれたシンボル群（図 3）である。テオティワカンではマヤやサポテカのように体系化された文字システムは確認されていないが、この住居群から発見されたシンボル群は、テオティワカンにも文字システムが存在した可能性を示唆するデータとして注目されている。ただし在地の遺物や遺構に混じり、オアハカ・由来の U 字型のタブレロ（垂

直壁）が建築装飾として使われ、シンボルも後の時代のソチカルコとの類似性が指摘されており、外国人居住区であった可能性もある。シンボル群以外にも壁面や床面に壁画が残されている。3 区のアパート式住居は、狭い間取りや小さな祭壇、石材に混じり日干しレンガが使用されることなどから、下層の人々が居住したと考えられる。緑色石、貝、骨、黄鉄鉱、黒曜石などの工房址が確認され、工芸生産を担った人々の住居であると考えられる。3 区では更に、エリート住居を含む 4 つのアパート式住居が部分発掘されているが、保護のために現在は地中に埋められている。4 区は 4-B 区と名づけられた北側に位置するアパート式住居のみが一般公開の準備中であり、その他は地中で保護されている。4-B には精巧な壁画が残されており、やはりエリートのためのアパート式住居と考えられている。4 区の大半を占める建築物の無い広大な区域は、貯水池であったとする説もあるが、共通する認識はまだ無い。5 区は 3 区同

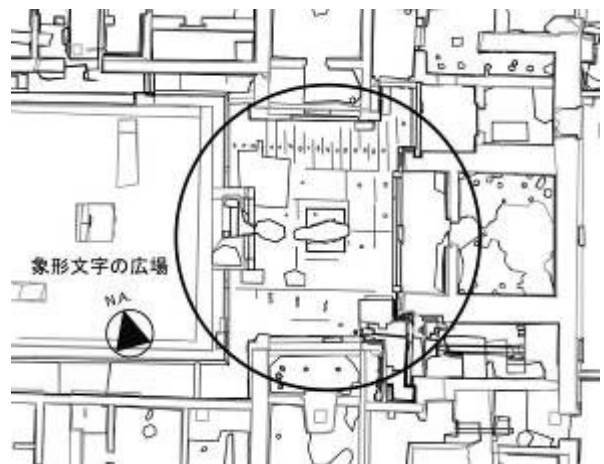


図 2 象形文字の広場



図 3 象形文字

様に工房社があり下層の人々の住居があった。

これらテオティワカン特有のアパート式住居は、30 個前後が既に調査されているが、それぞれ離れた場所のものが個別に調査されてきたため、隣接するアパート式住居がどのような相互関係にあったかの理解が困難であった。ラ・ベンティージャ地区は、隣接するアパート式住居が詳細な記録とともに調査されている唯一の事例であり、アパー

ト式住居を基本単位とする集団の相互関係やテオティワカンの支配者がこれらの集団をどのように管理していたのかを理解する上で貴重な資料を提供する地区である。巨大な計画都市を造り上げた労働力たる一般市民の生活が垣間見える場所として、テオティワカン観光の新たな魅力になるだろう。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後 1～2 ヶ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出、原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

* 投稿に関するお問い合わせ：

佐藤悦夫

〒930-1292 富山市東黒牧 65-1

富山国際大学現代社会学部

Tel : 076-483-8000 (内 2227)、Fax : 076-483-8008

E-mail : satoh@tuins.ac.jp

事務局からのお知らせ

1. 会費納入のお願い

2009 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2007 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

2. 会報への投稿募集

『会報』第 29 号への原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め

切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

3. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

<編集後記>

この夏の記録的な酷暑をみなさんは無事乗り切られましたでしょうか。私の場合、酷暑よりも、直前に列島各地で猛威をふるった集中豪雨の影響

をまともに受けてしまいました。集中豪雨が原因で被災した文化財を多数担当することになり、補助金の工面や修理方針等に奔走している毎日です。

また、京都市でなかったら指定文化財になって

いる物件なのにと、文化財所有者の方々からお叱りを受けたり、悩みを打ち明けられたりすることも非常に多い夏でした。指定されるかどうかは、修理時の費用負担に直結する問題です。

文化財の重要性とは必ずしも一致しない指定の有無を原因とした文化財修理支援の格差は、中南米でも同様だと考えますがいかがでしょうか。情報を教えていただければ幸いです。

また、気象の急激な変動による文化財の被災は世界各地で増加していると思います。人命救助や被災者支援が終了した後でも良いので、文化財の復旧に対して世界の人々の目が向けばありがたいと思う今日です。

最後に、事務局の佐藤さん、浅見さんの多大なるご協力のおかげで今回の会報を作成することが出来ました。大変ありがとうございました。

(馬瀬智光)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2010年9月30日
編集 馬瀬智光
古代アメリカ学会事務局
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
国立民族学博物館 関雄二研究室気付
電話：06-6876-2151 (代表)
Fax：06-6878-7503
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180-1-358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>